

寝ても起きてても魔物生
活

一味唐辛子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたらスケルトン?!

目的もなく、異世界でスケルトンに転生した男が頑張るお話です!

目次

骨になるとは思わなかったよ！	1
文明発見！	6
七つの大罪?!	12
また異世界転生かよ！	17

骨になるとは思わなかったよ！

「はあ、疲れた」

今日の仕事が終わりに家へ帰っても、することなど何もないが、何気なくパソコンを立ち上げ、またいつものゲームを開く。

『アドベンチャーオンライン』

今ゲーム好きたちの中で、流行っていると後輩に勧められるまま始めたゲームだ、レベルもそこそこ上げてきて、中級者と言われるぐらいには強いと自負している。

最初のダンジョンのザコ敵のスケルトンを倒しながら、デイリーミッションをこなし、ゲームをログアウトするのも忘れ、パソコンを閉じた。

「ふわあ、明日も仕事、明後日も仕事、こんなつまらない人生だったとはなあ」

◆ ◆ ◆
どうせならいつそ、異世界にでも生まれたかったよ……

◆ ◆ ◆
気付いたら洞窟にいた

さつきまで、自分の部屋でゲームしてたのに気付いたら、よく分からん洞窟に

いた、何を言ってるのか分からねえと思うが、俺も何を言ってるのか分からねえ。

ただまあこれが俗に言う『異世界転生』というやつなのだとは分かった、自分でも不思議とあまり驚きはしなかった。

しかし!ひとつだけ言いたいことがある、俺の姿についてだ、

(皮膚がなく、骨だけの身体)

(服装は、腰に申しわけ程度の布きれが巻かれており、存在しない俺の息子)

「どう考えたって!『アドベンチャーオンライン』最弱の敵キャラのスケルトンですよね!」



(ま、まずは現状を整理しよう、

ゲームしてた

パソコン閉じた

異世界転生

何故かスケルトン↑今ココ

全然分からん!

よな。　　こういう系のやつは、敵を倒して行って、最終的にチート並に強くなるやつだよな。

なら、まずは敵を探さないとなあ……

おお、ダンジョンの壁が割れてそこから敵が沸いてきたぞ！こういう仕組みなのか、しかも沸いてきたのは俺と同じ種族のスケルトンか。

フフフ、知能の無い俺の劣等種に人間様の実力を教えてやるか！

◆◆◆

負けたよ母さん……

嘘だろお！スケルトンめつちや強いぞ！パンチも速いし、殴られたところ凄え痛いし、絶対勝てないって！同じスケルトンとは思えん、自分の方が劣等種でしたね！ごめんね！

はあ、マジでどうしよ、ダンジョンをうろつくぐらいしかやることないぞ、出会ったスケルトンには殴られないようペコペコしてたし、てかこのダンジョン、スケルトンしかいねえのかよ！他のモンスターはいないのか！

プギー

何か音が聞こえたような？

プギープギー

プギユ!!?

「すわ!?今なんか踏んだぞ！」

プキープキー

うわあ、なんだこの小さいの、背中から小さい羽が生えてて、体が白い体毛で覆われてる、足から伝わる感触がめっちゃ柔らかい!

「か、可愛いなこいつ」

はっ!このモンスターなら俺でも倒せるのでは、いやいや、こんな可愛いモンスター倒せるわけない、むしろ仲間になろう(迷走)

「なあ、お前俺の仲間にならないか」

「ま、まあ、俺の言葉なんか通じねえか……」

プキー パタパタ

「うわっ!顔に張り付くな!ま、まさかお前も俺より強くて、俺を食おうとかいうオチなのか!や、ヤメロオ!」

ムギユ

あ、頭に乗った、お腹のモチモチが頭蓋骨から直に伝わる、やったぜ。

「な、仲間になつてくれるって事で良いのか?」

プキー!

「おお!」

すげえ嬉しいぞ、初めての仲間だ、多分俺より弱いけど、ものすごい安心感だ。

カタカタツカタカタツ

「また、スケルトンが壁から生まれやがった！仲間ゲットの余韻にも浸らせてくれないのかよ！」

「プギー逃げるぞ！勝手に名前付けたけど許してくれよな！そのまま俺の頭の上にいる！猛ダツシユで逃げるぞ！」

「ここから、俺の、いや、俺たちの冒険は始まるんだ！」

ドンツ！！？

グシヤツ！！？

「ふあ？！」

あ、アレ？？頭の上にいたプギーが消えて、目の前に、白い怪物がスケルトンを粉々にしてるのですが。

……目の前にいる怪物がプギーさんじゃないことを祈ろう。

ポンツ！

プギー！

「ですよね！プギーさんだよね！知ってたよ！俺がこのダンジョン最弱のモンスターって事は十分、わかったよ！」

ああ、俺はいつ強くなれるんだろう……

文明発見!

さて、何をしようか、まずは今の状況を整理しよう。

現実世界で寝る

←

異世界転生

←

スケルトンになる

←

プギー先輩マジリスペクトつす↑いまここ

ああ〜! 全く意味分からん、いや待てよこういう異世界転生物つて自分のステータスとか見れたりするよな、もしかして俺のも見れたりするんじゃないか!

「ステータス!」

「ステータスオープン!」

「鑑識スキル発動!」

ぶ、プギ(笑)

「チクショー！プギーてめえ鼻で笑いやがって！」

もういや、心が折れそう肝心のステータスも何も見えないし、一先ず自分の命を大事にして行きたいな、死ぬのは大丈夫みたいな設定だったとしても、痛いのはやだなあ。

「なあ、プギーお前もう一回さっきの怪物みたいな姿にはなれるのか？」

ブンブンブンブン

ううむ、全力で首を横に振られてしまった、しかしそうなるとさっきのプギーの姿は一体なんなんだ、一回変身したらクールタイムが必要なのかそれとも魔力的なのを使う感じなのか。

「よし、プギー今から俺が質問するから、はいだったら一回鳴いてくれ、いいえだったら二回鳴いてくれ、分からなかったら三回でよろしくな」

プギー！

「うんうん、じゃあ質問してくぞ」



プギーにいくつか質問して、分かった事が大分ある、質問の内容をもう一回整理してみよう。

1つ目に、プギーが俺の味方であると言うこと。

「プギーは、俺の仲間って事でいいんだよな?」

この質問に対し一回鳴いてくれたから、プギーが俺の仲間であると保証してくれたわけだ、ついでに言うところプギーが俺の言葉についてかなり理解してくれていたってのも嬉しかった。

意思疎通は大切だしなあ。

2つ目に、プギーの変身には何かしらの力を使用していたということ。

プギーに変身には時間が必要なのかと聞いたところ、いいえと言われてしまったので、魔力が必要なのかと聞いたらそれもいいえと言われてしまった。

時間や魔力以外に何か別の力を消費して変身するのかと、質問したら、はいと返事が返ってきた、それが何かまではプギーにも分からないらしい。

3つ目に、プギー自身もいつのまにかこのダンジョンにいたらしい。しかも記憶も失くしているという。

その後、プギー自身のことや、ダンジョンの事、異世界転生の事などを聞いてみたが、分からないこと尽くしだった。

現状を知れたのは良かったが、今の俺たちはスケルトンに襲われただけで全滅する戦力なんだよなあ。

取り敢えずこのまま動かないってものあれだから、ダンジョンを進んでいくか、

降りてつてるのか、昇っていつてるか、分からないが、俺たちでも倒せそうな魔物もしくは、冒険者が落としていった剣とかあればいいなあ。

まず、この世界に人間がいるのかって話しなんだがな。



プギー♪プギー♪プギー♪

「ハハハ、プギーは楽しそうだなあ、かれこれ一時間ぐらい歩いてるのに、よくそんな元気があるなあ」

どうしよう、予想の10倍ぐらいしんどいぞ、変わらない風景がこんなにキツイとは思ってなかった。

どこまで行っても壁、壁、壁尽くしだ、しかもスケルトンも全く沸かないし、近くに魔物を寄せ付けないぐらい強いやつでもいんのかな？

ハハツ、まさかなあゝ

プギー！プギー！

「お？どうしたんだプギー」

ペシペシ

「アイター！痛いぞプギー！急にどうしたんだ、言つとくと俺の頭蓋骨はそこらへんのスケルトンより柔らかいからな丁寧に扱えよ！」

バンバンバンバン

「割れる! 割れる! 頭蓋骨割れるつての! プギーさん人の話聞いてます!? アタタタ、なんだよプギーそっちに何があるつていうんだ……へ?」

プギーが向かせた道の奥にそれは確かにあった、見間違いでもなんでもなく、何十年ぶりに見たような感覚と感動が、道の奥には蔦が生えていて、どこかカビ臭そうな木の扉があったのだ。

「お……おいプギー、あれつてもしかしてよ」

プギー?

「き……き、木の扉だよなあ!!」

「誰かがあそこにいるんだ! いや、居なかったとしても、誰かが居たというのが重要だ!」

「俺たちのこの先がちよつと明るくなって来たぜプギー!」

プギー! プギー! !

さつきまでのしんどさや疲れなんかは全て吹き飛び、ただがむしやらにその扉に向かって走っていった。

くうくう! 遂に来たぜこの瞬間が、この扉は俺とプギーのこの先の人生、いや、魔物生を大きく分ける分岐点に違いない!

扉を開けるとそこには……

「シア？なんで、強欲のヤローがここに居んだよ、ボクになんかヨウか？」
気怠そうにこちらを見てる、白髪ロングのロリが居た。

「ふあ？」

んか見てねーよ！誰だよ天気の話題は失敗しないと云ったの！俺だよチクショー！！
「オイ、ソコのオモシロガイコツ、ドアの前で頭抱える踊りしてないで、早くナカに入ってくれナイカ？」

「あ…ああすまん、すぐ行く」

しっかし、謎は尽きないな、まずダンジョンの事についてや、この子についてとか気になるが、何より気になるのが……

なんでこの子微妙な片言で喋ってんだろう。

私気になります！いやマジで、日本にもこんな子いなかったぞ、片言なら片言で貫けば良いのに、何故貴様は微妙に片言じゃないんだ！ああモヤモヤする。

◆ ◆

「ン、ココらへんでいいか…」

「ガイコツ、椅子なんてモンは無いから適当にソコらへん座れ」

「あ、ハイ」

「ンア、ソレでオマエの頭のソイツについてだっけか？」

「そ、そうだ！教えてくれよ、プギーが強欲って一体どういうことなんだ？」

「話しすんのはニガテなんだがマア教えるか」

「まず、ソイツが強欲ってコトについて説明するナ、オイラ達が今いるコノ世界【ボアム】

には元々7人、イヤ、7体の英雄が居たんだ、ソノ英雄達はこのボアムに突如現れた
ファースト・シン一番最初の罪を力を合わせて倒した、しかしナ、ソノ一番最初の罪は強大すぎたんだ、ソ
 ノ7人の英雄はそれぞれに罪を与えられ、最悪の呪いを受けちまったんだ。

ソノ7人の英雄の内の1体がソコにいる、丸っこいヤツつてワケだ。話しはま
 だ続くがここまでで何か質問あつたりスルカ?」

「あ、あのな、めちやくちやどうでもいい事だが1つ聞いていいか?」

「ア、なんでもイイゼ」

「それじゃあ……何でお前微妙に片言なんでございますでしょうか?」

うう、やっぱ変なこと聞いちゃったかな?今になつて後悔、ハ!!もしや、片
 言でなければならぬ理由とかがあつたのかな?うわあ、また失敗した!失敗した
 !失敗した!

「プツ!プフツツ!クツフフ!」

「へ?一体どうしたんだおま「アツハハハ!」

「フヒー!オマエ変わつてるよ!オイラの今の話し聞いてたのかオマエ!オイラへの最
 初の質問がこのダンジョンのコトやオイラのコトじゃなくて、オイラの口調についてか
 よ!アツハハ!オマエ面白いな!気に入ったぜ、適当に話してすぐ帰そうと思つたが、
 1から10しつかり話してヤルヨ、あ、ちなみにオイラの口調が妙にカタコトなのは生

「まれつきダゼ」

「あ、えつとく、なんかアザス」

「何で感謝してんだよ！フヒヒ！ハハ笑った笑った、ヨシじゃあ続きを話してイクゼ」



「コノ世界ボアムに7体の英雄が居てソイツらが一番最初の罪に呪われたつてのは話したよな、てなわけでオマエの頭の上のソイツが強欲の罪を受けた英雄なんダヨ、そしてオイラが怠惰の罪を受けた英雄の一人つてワケだよ、そしてなんでオイラがソイツがいるのに驚いたかって言うとな、ソノ7体の罪たちは呪いを受けてすぐにボアムを滅ぼしたンダ、そしてソイツらはそれぞれが別々の世界に飛びその世界を支配し、自分のものにしたンダ、オマエの頭の上のソイツも自分の支配した世界があるはずなのに、何故かボアムに戻って来てるンダヨ、しかも今のソイツは罪に呪われてない時のソイツなんダヨ」

なるほどな、しかしまあ、俺の知能じゃ理解するので精一杯だったが……

「なあ……一つ質問があるんだが」

「ナンダ？」

「お前の支配してる世界は何処にあるんだ？」

「お前の話しからすると罪たちは一人一つ支配してる世界があるんだろ、それじゃあ、お

「前の支配してる世界は一体何処なんだよ」
ニヒッ

また異世界転生かよ！

「な、なんだよそのにやけ顔は……」

まるで蛇が獲物を狩るかの様な鋭く細い視線をこちらに向け、ゆっくりと口角を上げたその顔は今から自分たちは狩られるのだと思わせる感覚があった。

はあ…はあ…

不味いな、地雷でも踏んじまったか……

ふっ…と身体が軽くなった

「ウヒヒ、ソナナにビビんなくて、オイラがちよつと威圧したダケでソナナだとコノ先思いやられるぜ、全く……」

「言つとくケドナー、オイラは怠惰の罪ダゼ、なんでワザワザ他の世界を侵略しなきゃイ

ケナイのさ」

「マア簡単に言っちゃうとオイラの支配してる世界はココ『ボアム』ってなワケ、滅ぼされたって言ってもマダ生命は生き残ってるんだぜ、マ! 生き残りが少なすぎて支配してるオイラへのしつぺ返しもないし、最高のダラけ場所ってなワケ」

「なるほどな、流星は怠惰の罪って言った所か、自分がだらける為には全力って訳だな」
だとしても、支配者がこんな穴蔵みたいな所にいるなんて、不自然な話だな、何か理由があるのか…

「ンア? ナンカ言いたげな顔してるなどうした、変なもんでも食ったか?」

「ああ、いや何でもない、ただ外の世界のことがちよつと気になってな」

「外の世界? ンなモン行けば分かるダロ」

「いやいや、行けば分かるって言ったって今ここダンジョンの中だし、どうやって出るんだよ」

「ああ！やっぱりお前が支配してるとっただけあつて出口とかもちやんと分かつてるのか
！」

これで一安心だな、外は滅ぼされたつて言つてたけど、生命がまだいるつて
言つてたし取り敢えず呪いで骸骨にされたとかで、話し合いに持ち込めるかな？まあ一
旦出てみないと話しにならないな。

「ンア、出口？何でオイラがそんなもの知つてなきやいけないのサ、マ、取り敢えず外の
世界に連れてきや良いんダロ」

怠惰の罪はそつと手を前に出した

《ワームホール》

「ンジャ、行く世界は自分で決めてイイゼ、もつかいコツチの世界来たら挨拶ぐらいはし
ていけよ」

「ちよ！待つ

プギーー!!

溢れんばかりの光を持った謎の球体が、爆発したかのように俺たちの視界を光で埋めた。



(何処だここは?)

(目の前が真っ暗だ、第六感も身体感覚も何も感じない)

(浮いてる?この表現が一番合ってる気がする、ただ、今自分が前に進んでいるかも分からない…一体何処なんだ此処は)

「「選べ」」

(選べ? 一体何の事だ、誰だ、誰が居るんだ)

「「選べ」」

「貴様に許された世界は今三つ、その中から一つを選べ」

「俺の世界は憤怒と?????の世界」

「私の世界は色欲と?????の世界」

「儂の世界は暴食と?????の世界」

「「選べ」」

（なんだ、言葉の後半がよく聞き取れなかった、もう一度聞けないのか?）

「……………!!」

（こ、声が出ない!なんでだよ!今あいつらが言った世界から一つを選べなきや行けないのか!）

（ああもう!声が出ないのにどう伝えればいいんだよ!）

「念じろ、俺達に聞こえるくらい強く念じろ貴様のような脆弱な者の声も俺達は聞いてやろう」

(念じる!? ふんぬぬぬぬ!! もう一回世界の説明お願いします!!)

「ほう、骸骨風情が生意気にも俺を選んだか…」

「あらあら、残念ね、じゃあまたね骨の坊や」

「ホッホッ、憤怒の奴の所を選ぶとはなかなか骨のある奴じやのスケルトンだけにな、フオフオフオ！」

(あれえ? なんか話進んでない? え、僕何処の世界行くつて? 憤怒? 明らかにやばそうじゃないですかー!!)

「俺の世界に貴様の様な骸骨が入ってきた瞬間溶けきる、新しい身体を用意してやる、後は知らん、勝手にやっつてろ」

(ちよ、ちよつと! 待てー!!!)

「取り敢えずは歓迎してやるよ、骨野郎」

「ようこそ、憤怒と機械の世界へ…」